

# 「意外である」ということと「問い返し疑問」について

近 藤 研 至

## Unexpected situation and echo-question in Japanese

KONDO Kenji

In this paper, I attempt to give a full description of echo-question in Japanese. It has been pointed out that echo-question in Japanese is used to ask a question. But sentences like “Matsubusi?” and “Hito ga iru?” appear in situations when one talks to oneself.

When the speaker feels that there is opposition among assumptions and situations, it occurs that he cannot make an entry into assumptions. When the speaker feels it, he expresses sentences like “Matsubusi?”. Echo-questions belong to such a question category.

### 0 はじめに

たとえば、

(1) a 「クララが立った！」 b 「えっ？クララが立った？」

において、bの発話は従来「問い返し疑問」と扱われる。では、

(2) (誰もいないと思って登っていた沢で、なにか人の気配を感じて)  
「人がいる？」

は、「問い返し疑問」であろうか。従来の「問い返し疑問」の記述に従えば、(2)はそのカテゴリーに属するものとは扱われない。

小論は、「意外である」という文脈を持ち込むことで、従来「問い返し疑問」と呼ばれてきた表現と、((2)のような) それと非常に親和性の高い

と思われる表現について扱う。ただし、この作業は、単に(2)のような表現を、あるカテゴリーの中に押し込めるということを目論んだものではない。

## 1 従来の「問い返し疑問」の扱い

たとえば、なにかをたずねるという意図を実現するために、どのような発話をするのかということの記述と、形式としての「疑問表現」の記述とは、(もちろん親和性が高いが)視座が異なる。仁田(1987)は「疑問表現」について(ア)疑い性(「言表自体めあてのモダリティ」の側面)(イ)問いかけ性(「発話・伝達のモダリティ」の側面)という二つの視点から記述している。そして仁田は「発話・伝達のモダリティ」と「疑問表現」とは別のものとして論じている。すなわち、「疑い性」のあるものは、その伝達のあり方から「問いかけ」と「述べ立て」という「発話・伝達のモダリティ」を帯びるわけであるが、それは「表現」としては「疑問表現」と記述していく。この態度は、かなり柔軟であり、多くの表現を「疑問表現」として捉えていくことが可能になり、その後の「疑問表現」についての記述は、多かれ少なかれ、この仁田の視座を継承しているといっても過言ではない。

仁田は、「発話伝達のモダリティ」の観点から記述した「問いかけ」と「述べ立て」の「疑問表現」にそれぞれのサブカテゴリーを記述していて、「問い返し疑問」は「問いかけ」の一つとして扱われている(註1)。

- (3) 不明なところが存在し、かつ、それを聞き手に問いかけてはいるものの、その不明な部分が話し手の構築しつつある判断にあるのではなく、不明な部分が、言語表現として相手の発話は了解しているが、その真意、意味する所やその妥当性が把握しかねたり、使用されている単語の指示対象が把握しかねる、といったあり方で、相手

の発話に存在し、その不明な部分を相手に問い返す、といった疑問表現がある。この種の疑問表現を、〈問い返し〉と呼ぶことにする。〈問い返し〉には、相手の発話の先行が前提になる。〈問い返し〉は、その真意、意味する所や指示する所の把握できなかった相手の文および文の一部を繰り返すことによって行われる。

ここで仁田が記述した、「問い返し疑問」の、「相手の発話が先行する」・「不明な部分が相手の発話の中にある」・「繰り返し性」・「問いかけ性」という性格は、その後の「問い返し疑問」研究に継承されていると言える。たとえば安達(1989)は、「問い返し疑問」について専門的に論じた先駆的な研究であるが、仁田の記述をふまえた上で、その「繰り返し」方がどのようにおこなわれるのかというテクニカルな記述になっている。安達は、「相手の発話が先行する」と「繰り返し性」という観点を特立させ、「問い返し疑問」を「引用」的な性格として処理している。「疑問表現」について「不確定情報」という観点から記述をより洗練させた森山(1989)も同様に「一種の引用的な用法」として扱い、「問い返し疑問」に現れるモダリティ形式についての説明をしている。また、「一語文」による「プリミティブな疑問表現」について詳細な検討を行った森山(1997)でも、「聞き返しは、言語記号そのものの繰り返しによる伝達的なチェックなのであり、意味的な問題とは無関係にどのような表現においても成立し得る」<sup>(註2)</sup>としている。

## 2 従来の「問い返し疑問」の扱いと問題点

仁田とそれ以後の研究は、文に対する扱いは、かなり違うところがあるが、基本的な部分は共通している。それは、文と発話とを異なったものであると処理しているところである。すなわち、仁田が文から「言表事態めあて」と「聞き手めあて」という側面を抽出し、前者を文に内在

するものとして捉えようとし、後者を発話のレベルで捉えようとしていることは、用語は違うが、態度としては共通している<sup>(註3)</sup>。そのため、「疑問表現」という用語によって指示されるところのものは、仁田以後の視座は共通していて、それを発話のレベルで捉えてはいない。「問い返し疑問」が「疑問表現」であることについては共通しているし、それは小論の筆者も問題にしようとは思わない。しかし、そうした「疑問表現」というレベルではなく、「問い返し疑問」を、発話のレベルで、すなわち「問いかけ」として処理していることが共通していて、その点が小論では首肯できない事柄である。

従来「問い返し疑問」について記述するとき、ほとんどが「相手の発話が先行する」ということを認めている。そして、(それは本来リンクしないはずなのだが) そのような「発話」を発する主体(相手)がそこにいるということを含意し、その「相手」に「問いかける」と処理されていると言えよう。それは「問い返し疑問」として扱われている例文が、すべてそのような例文であることから理解できよう。

しかし、たとえば、車で「三郷」を目指して走っているときに、信号待ちで見た標識に「松伏」とあったとしよう。そのときに、

(4) 松伏？

という発話を行った場合(森山は未分化な「プリミティブな疑問文」として扱っているが)、確かに「発話が先行」しているが、そこには「発話」を発した「相手」が存在しない。また、本を読みながら、「これが日本に稲作をもたらした原因である」という箇所を読んで、

(5) これが原因だと？

と発した場合、やはりそれは直接的に眼前に「相手」が存在していない。従来「問い返し疑問」が「問いかけ」の категорияで処理されているということは、「発話が先行する」ということと、問い返された内容に答え

る能力がある「相手」がいるというのを切り離せないものとして扱った結果であるといえよう。しかし、ここで見た例文は、いずれも、そうした能力をもった「相手」が、眼前にいない。

さらに、

- (6) A「佐多さんがさあ」 B「うん、佐多さんが？」 A「昨日さあ」  
B「昨日？」

などのような場合は、眼前に答える能力を持つ「相手」がいるのであるが、仁田が「問い返し疑問」の性質としてあげた「不明な部分を相手に問い返す」という側面を持っていない<sup>(註4)</sup>。

(4)～(6)の例文は、「問い返し疑問」の、その（「発話が先行する」ことから）「繰り返し」性はいずれも有してはいるものの、「相手」に向かって「問いかけ」てはいないし、「問い返し疑問」であるということは否定できない。だとしたら、「問いかけ」性とが直接的にリンクしていないということになり、「問い返し疑問」をどのように性格づけるかという点で、今までの扱いを修正しなければならなくなる。

ところで、上で見た例は、いずれも（「相手」は直接的に存在しないが）「発話が先行する」という場合であった。しかし、次のような場合はどうであろうか。たとえば、沢を深く遡って、そこには誰もいないと思って釣り糸をたれていたとき、何か人がいる気配を感じた。その時、

- (7) 人がいる？

と発話したとしよう。これは、「人がいるかないか」を問う文ではない。また、「人がいるのか？」とそこにいると思われる「相手」に問う文でもない。また、「人がいる」ことを疑っている文でもない。同じように、最近ずっと通行止めだった箇所をさしかかって、そこが通行可能な状態であるのを発見したとき、

- (8) 通れるようになった？

と発話した場合、その「発話」も、「通れるようになったかなっていないか」を問う文でもなければ、「通れるようになったのか」と「相手」に問う文でもない。これらは、「発話が先行する」という「問い返し疑問」の条件を満たしていないが、「問い返し疑問」と非常に似た文として、ここでは指摘しておくにとどめる。

### 3 「意外である」ということ

結論を先取りしていうと、小論は、仁田が「問い返し疑問」を、「問いかけ」のサブカテゴリーとして扱っていることを問題視することで、「疑い」の部分において処理しようというものである。そのことを明らかにするために、「意外である」という状況を設定した中で、「問い返し疑問」を記述することをしてみよう。もちろん、小論では、「意外である」ということが、「問い返し疑問」の唯一の成立条件であるということを言いたいわけでもなければ、「意外である」という状況において、「問い返し疑問」だけが選択されるということを言いたいのもない。「意外である」という文脈を設定することで、「問い返し疑問」の性質をあぶり出そうという試みである。

「意外である」という感覚はどのようなときに生じるものなのか。たとえば、ある（ない）と思っていたものがなかった（あった）り、生起する（しない）と思っていた事態が生起しなかった（した）り、ある対象・事態の属性がそうである（ない）と思っていたのと異なったり、など、いわば予想していた事態と「対立」する事態に遭遇したときに生じることが多い。もちろん、そうした事態に遭遇する前からある想定（先行想定）を活性化させているかどうかは、「意外である」ことの必要条件ではない。たとえば、「妻が起きていたこと」が「意外である」と感じる可能性について考えてみよう。「今日は、早く寝るよ」という妻のことばを事

前に聞いていたり、いつもの習慣から「妻はいつも早く寝る」という想定を持っていたりして、その日の帰宅が遅くなったとしよう。そうして、「妻はもう寝ているだろう」という「先行想定」を活性化させて玄関を開けたとき、「妻が起きていた」という事態に遭遇した。このときに「意外である」と感じることもある。しかし、実際はそのように「先行想定」を活性化させていなくても「妻が起きていた」その事態そのものに遭遇して初めて「意外である」と感じることもある。この場合は、「妻が起きていた」という事態に遭遇し、その事態の生起が想定の内にあるかどうかという照会を行った結果「意外である」という感覚を生む。この二つのあり方は、事態と想定との間に生じる「対立」が、「意外である」ということを生じさせる原因であり、その双方の間にある、想定が先で事態経験が後、とか、事態経験が先で想定との照会が後、とかの方向性の問題は、問題にしないということの意味している。「意外である」という感覚は、こうした事態と想定とを照会して、双方の間に「対立」があるとき生じる感覚である<sup>(注5)</sup>。

#### 4 「問い返し疑問」の定位

森山(2000)は、

(9) (勉強していて、ふと時計をみて) あ、もう10時か。

というような表現を、「形の上では疑問文でも意味的に疑問を表さない場合」であって、「実際は情報の導入という意味になって」いるということから「疑問型情報受容文」としている。そして、

(10) …疑問型情報受容文は、それまで自分が疑問視したり推測したりしていた認識(先行認識)を前提として、新情報を導入することで、自分の認識を書き換えることを表すという意味になっているといえる。つまり、(事実扱いの)情報を受け入れることで、それまでの先

行認識と現実の新しい情報とが、いったん対立関係を構成するのであり、そこに疑問文という形式が使われる理由があると言えるのである。

と記述している。3で「意外である」ということについて触れたのであるが、森山がここで指摘している「新情報」と「先行認識」との「対立的な関係は、まさに「意外である」という認識を生む、その原因として3で記述してきたことに一致している。そして、その「対立関係」が生じたときに、「疑問文」が使用されるという、いわば、その処理過程に着目して記述されたものであると言えよう。

2で見たように、「問い返し疑問」は従来のような扱いでは記述しきれない例があり、こうした「対立」を前提とした、その処理過程において生じる「疑問表現」であると考えることによって、それらをも処理できると思われる。

(4)~(6)は、それぞれ「発話が先行する」という条件を満たしていたが、(7)・(8)はその限りではなかった。こうして「発話が先行する」というのを「問い返し疑問」の成立条件とすると、逃す表現が存在してしまうことになる。そのため、小論では、「先行想定」と「対立」するものを「事態」として、その「事態」が

(11) A 発話時に他者により言語化されている事態

B 発話時に話し手により言語化される事態

というあり方で存在するとしておく。従来「問い返し疑問」として記述されてきた表現はもちろんのこと、(4)~(6)は（その「相手」が眼前にいないが、その「相手」がだれであろうと）他者によって言語化されている、その「発話」と、それを認識しようとした話し手の「先行想定」とが（照会の結果）「対立」関係にあるといえる。また、(7)・(8)は、発話時において話し手が認識したその「事態」が「疑問表現」の形をと

って差し出されているものである。このように「事態」のあり方の異なりが検出されるが、「事態」と「先行想定」とが「対立」しているという点においては双方は共通している。もともと、AとBとは、それが「発話」であるかないかの異なりが、「対立」のあり方としてのバラエティを生じさせる。Bである場合は、「発話」でないことにより、その「事態」を叙述した表現としての性質があからさまに出るのであるが、Aの場合は、その「発話」によって叙述される「事態」から、形や意味内容や指示対象や発話意図までを、その「対立」の対象とすることができる。仁田が「先行する発話」の「不明な部分」と記述したことは、それはそれでひろい現象を説明するには優れた用語法であるが、それは、こうした「対立」における一つのケースを取り扱ったに過ぎないだろう。また、このことは、仁田や安達が「問い返し疑問」には「現象描写文」が多いと記述していることも説明ができる。従来の「問い返し疑問」の記述のように、先行した発話を「現象描写文」化して「問い返し」ているのではなく、その「先行した発話」の、その「事態」としての側面を「対立」としてきわだたせている場合があるからであると説明できるだろう。こうしたことは「発話」であるということによって生じることであり、「対立」そのものにとってはあずかり知らぬ性質であるといえよう。

このように、その「事態」の性格には異なりがあるものの、それと「先行想定」との「対立」が生じたとき、森山が「新情報を導入することで、自分の認識を書き換える」とした「疑問型情報受容文」とは異なって、「問い返し疑問」などの場合は、「先行想定と事態とを照会した結果、事態が想定に書き込めない」という処理過程において導出された表現であるといえる。Aは、その「発話」が「書き込めない」状態にあるもので、Bは（話し手において言語化された）「事態」が「書き込めない」状態にあるものである。なお、「書き込めない」という処理過程は、「書き込ま

ない」という態度も含意する。(6)の例文は、「発話」の中途であるということから、未だその「発話」全体において述べられる「事態」を「書き込まない」で、いわば保留状態として扱っているのではないだろうか。そのため、結果として「書き込まない」という扱いがなされ、それが「典型的な問い返し疑問」と同じ形式をもって表現されている理由であると言える。「事態」と「先行想定」との「対立」が生じたとき、その「対立」のゆえに、「事態」が「想定」に「書き込まない」ということが起こり、今度は「書き込まない」がゆえに、その「事態」を「疑問表現」のかたちで差し出す。こうした処理過程において導出される表現があり、そのサブカテゴリーに、従来「問い返し疑問」と扱われてきた表現類型があるといえよう<sup>(註6)</sup>。「問い返し疑問」の基本的な性格は上で述べたものであるが、それがあたかも「問いかけ」性を持っていると思われるのは、その「発話」者が眼前にいるという、いわば語用論的な条件による。こうした表現は、他の「疑問表現」同様、「書き込まない」がゆえに「疑問表現」のかたちをとっているのであり、「問いかけ」することは、聞き手の状況的な推論によってもたらされているものであるといえよう。

## 5 おわりに

「疑問表現」が、どのような出自から生じているのかということ記述するのは無理であろう。それは、人において「疑い」が生じるケースを網羅的に拾い上げるとか、「疑い」がなくとも「疑問表現」がとられる場合とはどんな場合なのかを拾い上げる、など、到底なしえない作業を迫られるからである。小論もちろん、そのような作業に向かうつもりは毛頭なく、小論が記述したところは、「事態」と「先行認識」との「対立」が、言語表現上反映されている文があることを指摘することと、「問い返し疑問」もこのカテゴリーに属し、そうした「対立」した「事態」が「想

定」に「書き込めない」ということを述べる表現であるということ指摘することにある<sup>(註7)</sup>。

【注】

- 1 南(1975)も同様の指摘をしている。
- 2 ここで森山が述べている「聞き返し」は、仁田(1987)でいうところの「問い返し」と「聞き返し」の双方を含んでいる。
- 3 もちろん、こうした態度の厳密さについては、文研究において後発の、たとえば森山(2000)の方が、仁田より洗練されていることは否めない。
- 4 もちろん、Bの発話が「佐多さんがどうした?」「昨日がどうした?」などと扱うことも可能かもしれない。そのような解釈であっても、小論が最終的に述べることは矛盾しない。
- 5 もちろん、「意外である」と感じることと、「意外である」ことを述べることは異なる。
- 6 ちなみに、仁田が「聞き返し」として扱った「え?」「は?」「あれ?」などは、「事態」が言語化されていない表現である。単に、書き込めないという、その態度の部分が表明されているものである。
- 7 もし、そのような態度で望むなら、上で引いた森山の記述は、それを容認すれば、さらにいくつかの「疑問表現」を拾い上げることになる。「そんなことあるもんか!」・「どうしてそんなことを言うんだ」・「あれっ?」・「今日は休みじゃなかったですっけ?」など、多くの「疑問表現」がこのカテゴリーにからめとられることになる。さらに、「彼は臨採を始めたはずだよ」・「部屋が丸くなっている!」などの、いわゆる「述べ立て」の中からも、そうしたことを背景とした表現を拾い上げることもできる。ただし、小論は、こうした表

「意外である」ということと「問い返し疑問」について

現を網羅的に記述することを目的としなかった。こういう表現を網羅的に記述するには、稿を改めなければならない。

【引用文献】

- 安達太郎(1989) 「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8.8  
明治書院
- 仁田義雄(1987) 「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』 大学書林
- 南不二男(1975) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』  
朝倉書店
- 森山卓郎(1989) 「内容判断の一貫性の原則」『日本語のモダリティ』  
仁田義雄他編 くろしお出版
- (1997) 「一語文とそのイントネーション」『文法と音声』  
音声文法研究会編 くろしお出版
- (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の  
文法3 モダリティ』 岩波書店

附記： 小論は、2001年度4年生の本田央恵氏の卒業論文、2001年度専攻科生の中澤由香氏の研究論文の指導の過程で着想を得たものである。